

「いじめ」再考

－「いじめ」の存在論的解釈をめざして－

野村 洋平（龍谷大学大学院）

はじめに

1980年代に社会問題として浮上してきた「いじめ」は、さまざまな視点から多くの研究がなされてきた。近年では、「いじめ」研究の25年間の総括するような研究も出てきている。本発表では、まずこれまで行われてきた「いじめ」研究を概観する。そして、学校における相互作用論的な視点や学校制度の問題から論じられていた「いじめ」に対して、存在論的な視点を導入することによって、「いじめ」が人間の本質に関わる問題であることを論じる。

1. これまで「いじめ」研究について

1980年代に社会問題として注目を集めてきた「いじめ」を振り返ってみた時、当時から現在までの約25年間に重要なポイントとなる「いじめ」事件をいくつか上げることができる。①1979年に埼玉県上福岡市で起こった林賢一くんの事件、②1986年に東京都中野区で起こった鹿川裕史くんの事件、③1994年に愛知県西尾市で起こった大河内清輝くんの事件、④2000年に愛知県名古屋市中区で起こった少年による5000万円恐喝事件、これら4つの事件は、社会的に大きな衝撃を与え、「いじめ」がもっている深刻な問題を人々に突きつけた。

これらの事件を研究する際、分析の中心となったのは、子どもたち同士の関係や、教師・親・子どもたちの相互作用を詳細に見ていくことであったり、学校組織や教育制度の持つ問題点を見ていくことであったりした。そして、そこから代表的な「いじめ」の定義や、継続的研究から明らかになった「いじめ」に関わる子どもたちの特徴が確立された。

また、25年間の振り返ってみた時、先に上げた4つの「いじめ」事件の特徴の変遷を考えることも可能である。①の事件で「いじめ」にあった林くんの場合、林くんが在日朝鮮人であったという烙印が「いじめ」の根拠とされ、②・③の事件では学校ではおとなしく、教師の目からも目立ったところの見られない生徒が「いじめ」にあい、④の事件では「いじめ」と定義してよいのかわからないほど事件が犯罪化している。＜排除→拘束→犯罪化＞というよう

に「いじめ」事件の特徴が変遷していったことをとらえることができる。

2. 「いじめ」の本質を考えるための一視点

さまざまな「いじめ」についての研究や「いじめ」研究の総括を考慮に入れ、現代の社会において「いじめ」を見ていく時に、次の2つの視点が今後重要になってくると思われる。

1つは、「いじめ」を学校内部だけの問題ではなく、学校を越えた広い視野と長いタイム・スパンとで見ていく視点である。「いじめ」の犯罪化に見られるように、「いじめ」は学校を越えて、社会生活のあらゆる場所に生じてくる可能性のある問題である（例えば、近年では会社の内部などでも「いじめ」現象が起こっている）。また、時間的な視点で見れば、「いじめ」を受けた子どもたちは、成長する過程で、かつての「いじめ」経験をトラウマとして自らの内に抱えて大人になって行かなければならない（例えば、近年社会問題として頻発している幼児虐待を行う親には、「いじめ」の経験を受けた者が少なくない）。

2つ目は、第1の視点とも深く関わるものであるが、人間関係、組織、制度といった社会内の横軸を中心とした視点だけでなく、「いじめ」というものに内在すると思われる、人間の本質に関わる視点、つまり横軸を常に貫いてゆく＜存在＞という縦軸を考えていくことである。

「いじめ」を抱えている集団の外部から「いじめ」が見えにくくなっているだけでなく、その集団の内部にいる者たちにとっても「いじめ」が分からなくなっているという時、そこには「いじめ」が＜存在＞という人間の深層にかかっていると言わざるを得ないだろう。

以上に述べた重要性を提示したことには、大きな根拠がある。その根拠の一つは、ルネ・ジラールが提示した「三角形的欲望」の理論に存する。ジラールは、「人間が他者の欲望を模倣せざるを得ない存在である」ということを文学研究から引き出した。例えば、ある兄弟がいて、その兄弟におなじおもちゃを与えたとしても、弟は兄が持っているおもちゃ（対象）を同じものとは考えず、兄の持っているおもちゃを欲しがってしまう。ある対象に向けて強い欲望を持

っている者（兄）を、それを見ている者（弟）は模倣せざるを得ない。ここで欲望を持った二者（兄弟）は、モデル＝ライヴァル関係にあり、常にお互いの欲望を監視し、時にはその欲望を巡って両者の間にいさかいが起きる。この、ジラールの「三角形的欲望」の理論に基づいて、亀山佳明は、学校内で生じる「いじめ」を、教師と生徒との間にもたらされる「三角形的欲望」の昂進という視点から論じた。

3. <存在>に根をおろす「いじめ」

ジラールは、「三角形的欲望」が昂進する人間関係の中においては、欲望や嫉妬といった潜在的暴力が渦巻くとした。この欲望や嫉妬をさらに考えていくなれば、マックス・シェーラーが提唱した「ルサンチマン」の理論に行き当たる。

シェーラーは「ルサンチマン」という語には、
「(1)他者に対する一定の情緒的な反作用がくり返しもちこされ、生きのこり（その情緒ならびにそれに「対応」したなりゆきが、たんに思い出されるというのではなく、情緒自体が再体験されるということを意味する）、反作用を通じてさきの情緒が人格の中心部へ深まりゆき、沈んでいくとともに、その人間の表現域、行動圏からは次第に遠ざかっていく、という性質」
「(2)（ルサンチマンという）情緒の性質が否定的なものであることを含意する、すなわち、敵意を抱く性質の動きを含んでいる」という2つの要素が含まれているという。「ルサンチマン」を持った者は、相手からの攻撃や敵意に対してすぐに行動には出ず、その相手に対して生まれる憎悪・嫉妬・妬みなどを自分の内部に抑制してしまう。また、反撃したときに生じる相手からの再攻撃を予見し、反撃をやめ、極度の不能感、無力感を抱えることになる。

これらの特徴は、「いじめ」に関わる者たちに共通の特性としてしばしば指摘されてきたことであるが、シェーラーの「ルサンチマン」論の持つ重要な点は、その「ルサンチマン」が意識の表面に留まらず、「人格の中心部」に深まりゆき、沈んでいく」という点にある。この点から考えられることは、いじめる者にしろ、いじめられる者にしろ、「いじめ」に関わった経験を持つ者は、「いじめ」という具体的な場面を離れても、その経験を「再体験」し、「いじめ」から生じた感情（「ルサンチマン」）を<存在>の内部にまで根ざしてしまうということである。したがって、「いじめ」により自身の<存在>を大きく傷つけ、それを抱えたまま生きざるを得なくなる。

4. 存在論的解釈から見えてくるもの

人々の間にあった差異（地位や階層や経済的格差）はかつてほどなくなり、他者の欲望するものが容易に自分自身の手に入ると錯覚するような現代の場合、人々は新たな差異や些細な差異を求めたり、他者の持っているものの価値を「ルサンチマン」によって貶めたりすることによって、「三角形的欲望」や「ルサンチマン」の弊害を生み出してしまふ。貶めた他者の人格によって、相対的にしか他者に接することができず、また、自己の<存在>を認めないで、常に本来の自己や<存在>からの逃走が起こり、自分をごまかすことにもなる。

「三角形的欲望」、「ルサンチマン」の昂進した社会では、人々はそこから脱出することは非常に難しい。なぜなら、<存在>の奥深くにこのような病理が巣くっているからである。しかし、それでもなお、その病理からの解放を目指すのであるならば、比較によって現れてくる相対的な他者に立ち向かうのではなく、エマニュエル・レヴィナスが言ったような、「絶対的な他者」に向かい合わなければならない。「絶対的な他者」は私たちが貶めたり、包摂したりしようとしてもできない者として現われる。したがって、「他者」の<存在>そのものにより、私の<存在>が揺り動かされる。「他者」の<存在>をそのまま認めることは、「他者」の<存在>をいかに貶めていくかが、中心となる社会ではなかなか難しい。「他者」の<存在>は時に、不愉快であり、社会的悪であったりする。しかし、その「他者」の<存在>を認め、病理的なシステムから生じる欲望や、「ルサンチマン」といった感情を「断念」しない限り、悪循環を裁つことはできない。そして、その「断念」に基づいた時、「他者」の<存在>を認めるとともに、本来の自己の<存在>をようやく認められることになるのである。

おわりに

存在論による「いじめ」の解釈から、さらにさまざまなことが検討できると思われる。例えば、「いじめ」に存在論の視点を導入すれば、「いじめ」が及ぼした影響を継続してさらに分析することが可能になり、また他の社会問題（例えば、幼児虐待やひきこもりなど）とクロスさせた分析が可能となるだろう。また、存在論の視点から、他国との比較を行えば、さらに日本の「いじめ」の問題点や、他国との存在論における「いじめ」の共通点・相違点が新たに発見できると思われる。